資料2

将来都市像

○○○○○○○○○○○○○○（キャッチフレーズは今後決定）

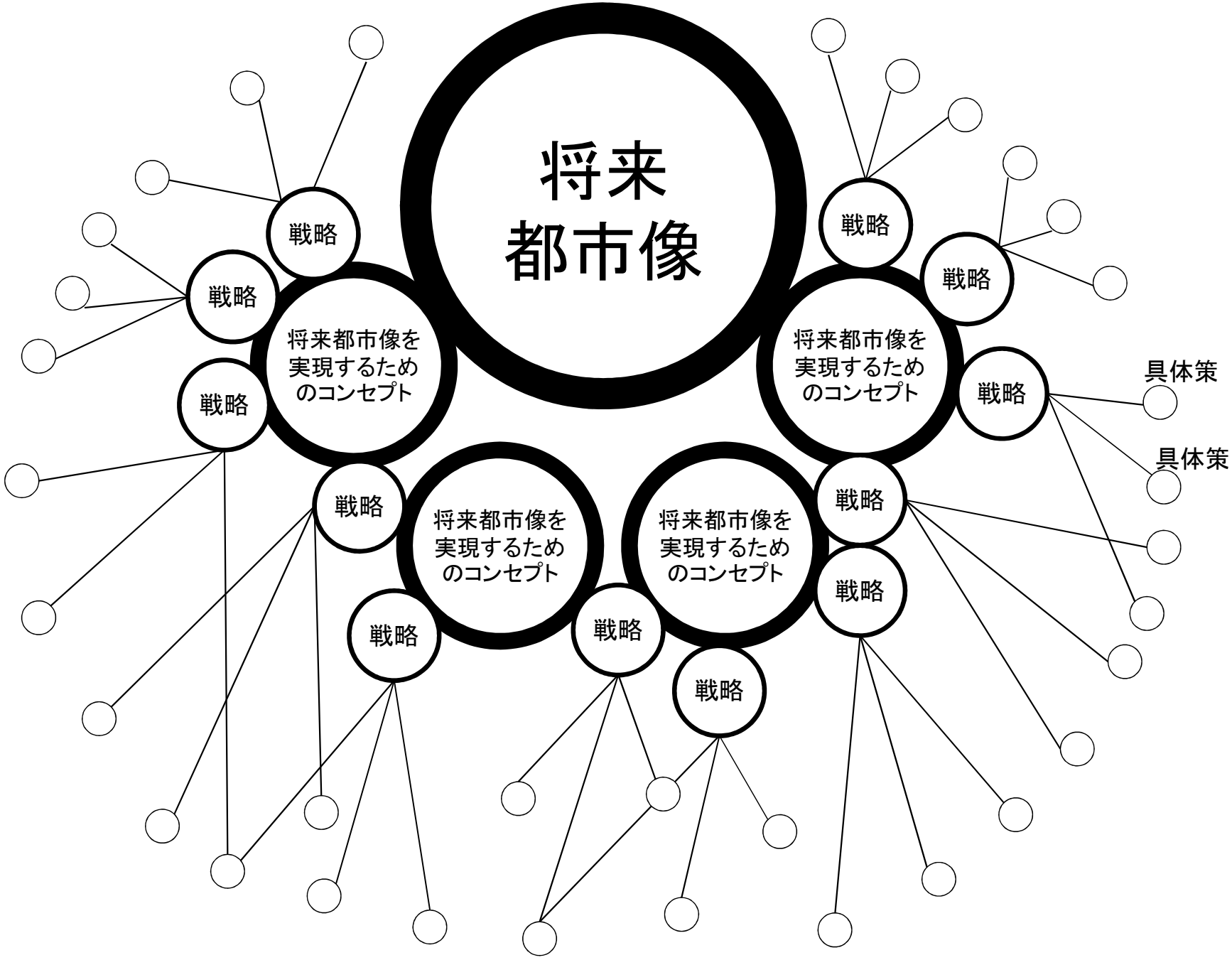
宮代町では都市的な要素と田園的な要素が混在している。
都市的な無機質感と田園的なムラ気質、は良くない側面だが、
都市的な洗練さ、と田園的な居心地の良さ、は宮代町の「売り」である。
この両方を兼ね備えている市町村は、そう多くはない
都市と田園の絶妙なバランスが「宮代らしさ」を作っている。

宮代町はかつてのように、都心に通勤する人たちのための町ではなく、
今では、宮代町に居住し、近隣で働く人たちの割合が高くなっている。
宮代町はすでに東京のベッドタウンではない。

コンパクトな町の中に都市の良さと田舎の良さを兼ね備えた宮代町
コミュニティに立脚した活動が盛んで、
活動自体やそれに取り組んでいる人々も、顔の見える距離にある
ここをセールスポイントして力を入れて行こう

次の10年は、「宮代らしさ」を創出する機会の到来だと考えよう。
住みたい、住み続けたいと思える町を目指そう。

概念図



将来都市像を実現するためには、複数の「コンセプト」、複数の「戦略」が相互に関連しあい
重層的に動くことが不可欠であるため、上から下へ系統的なものでないことを表しています。

コンセプト1　宮代らしさを価値として高めていく

　東武スカイツリーラインの終点である宮代町は、北関東の入り口であると同時に、東京への入り口でもある。わずか16平方キロの中に宮代町の魅力を高める要素がふんだんに詰め込まれている。

　日本工業大学、東武動物公園が立地し、進修館、山崎山、新しい村などの資源は人々を惹きつける魅力にあふれている。日常的に多くの人々が多様な活動をする中で交流が生まれ、新たな取り組みが生まれている。

　宮代町では建物が低層に立ち並んでいる、空が高い、駅を降りて視野の先に平地林が見えるといった特性がある。宮代町では小生物、鳥など、私たちの生活が自然とともにあることを実感させてくれる。こうした宮代町の特性は、都市においてはすでに失われ、望んでも手に入れられないものだ。

　古利根川や姫宮落川など大小の河川が流れ、沿うように点在する桜は約4,000本。各地域の神社、仏閣、教会、地域に今も残る行事は有形無形の魅力を今に伝えている。

　町に住む人も、外から訪れる人も、こうした宮代の良さをかけがえのないものとして共に認識し、未来に紡いでいくことで「宮代らしさ」を価値として高めていくことが大切だ。

　そのためには、町民自身が町の良さを知り、外に伝えていく。また、ハード事業、ソフト事業を問わず、町の施策の一つ一つで、こうした宮代町の良さを意識しながら事業を進めて行く、そして外に向かって、繰り返し丁寧に「宮代らしさ」を伝えていく、「さすが宮代」「なるほど宮代」「やっぱり宮代」と思わせる取り組みを進める。

戦略Ａ　町の原風景を形づくる「農」の資源を活かしていく

田や畑、雑木林、河川など、町の原風景を形づくる「農」の資源は、人が自然に手をいれることによってつくられてきた。また、宮代町では、里山的な風景が農村集落を中心に形成されている。こうした地域資源を農業だけでなく、観光や教育、福祉など様々な分野で資源を活かすことで、町の取り組みの魅力や価値、独自性を高めていく。

戦略Ｂ　東武動物公園駅西口ゾーンの魅力を高める

東武動物公園駅西口周辺には、進修館、笠原小学校、新しい村、東武動物公園などが狭い範囲の中に点在している。町の玄関口であるこのエリアには、町外から多くの皆さんが訪れる場所でもある。このエリアをトータルで考え、整備し、賑わいを演出することで、他地域とは違う「宮代らしさ」を展開していくことができる。

戦略Ｃ　”宮代”を発信していく

改めて町に目を向けてみよう。今まであたりまえだった景色や出来事、知らなかった地域の取り組み、町を深く知ると気が付かなかった町の魅力が見えてくる。同じ魅力に共感する仲間が必ずいる。町を知り、町を伝えよう、そして大いに町の魅力を自慢しよう。

コンセプト２　コンパクトな町の強みを活かす

町域が狭く、その中心を鉄道が縦断している、ということや、そもそも過去において、コンパクト化を指向してきたということもあり、他の自治体が望んでいる姿が、すでに宮代町には存在している。コンパクト化している宮代町の特性が高齢化社会の中においてはプラスにはたらく。

また、コンパクトなまちは、比較的顔が見える関係を築きやすいことでもある。住民と住民、生産者と消費者、店舗と顧客など、顔が見える関係を広げ深めていくことは、安心や安全、ひいては地域経済においても好循環をもたらす。

しかし一方、これからの10年は、さらなる高齢社会に突入する10年だ。「今まではそうだった」になっているのではないか。つまり、高齢になると生活範囲が狭くなってくるので、進修館に出てきて何かをする、というのができにくく、なる。それよりもむしろ、地域の集会所や公民館で活動する機会が増えてくる。

住民の足は進修館や役場から遠のき、自分自身が生活する半径200メートル程度の世界に孤立してしまう。こうした皆さんは、行政には無関心だし、興味は持たない。行政に対して、あきらめに近い気持ちを持つようになってはいけないと思う。行政の目がとどかない人々が出現してはいけない。

そこをサポートするために、地域ごとの地域交流サロンなどを支援しているが、地域コミュニティの核となり、住民同士が交流できるというだけでなく、行政が役場という本丸を出て、地域コミュニティをサポートし、住民との共同作業ができる仕組みを作っていくことも必要になってくる。

戦略Ｄ　歩きたくなる「まちなか」をつくる

和戸駅、姫宮駅、東武動物公園駅を中心として過去に整備した市街地にあっては、高齢化や少子化などにより、その生活圏に求められるものも変化している。こうしたことに対応し、魅力を高めるためのハード、ソフト両面からのアクションが必要だ。

町の活性化には、多様な人々の出会いや交流が欠かせない。芝生やカフェ、椅子がある歩道や公園、ガラス張りの店舗やオープンカフェ、多様な使い方でできる空間など、ゆるやかなつながりやコミュニティが生まれる居場所が必要だ。居心地が良いまちなか（市街地）を創ろう。

戦略Ｅ　日々の生活のアクセス性を高める

更なる高齢社会に突入し、高齢者の移動手段が自家用車から他の手段へと変化している。また、遠くへの移動そのものが困難な方も増えていく。この変化に取り残される人があってはならない。

戦略Ｆ　顔が見える地域経済をつくる

大量生産消費経済の「顔が見えない経済」から「顔が見える地域経済」へ移行し、お金も人もできるだけ、地域の中で循環させよう。人口減少時代を迎え、ローカル主体の経済を少しずつ創っていこう。

コンセプト３　さまざまな活動や主体を生み出す

人口減少、高齢化に対応するためにはかつて例のない(あるいは予測できないような社会変化)にも対応しなければならない。行政が旗ふりをして市民を組織するという時代ではなく市民自らが足元の課題に気づき意思をもって解決にあたることが重要だ。

町が行政課題を的確にとらえ足元の問題を解決していくのと同じぐらい、あるいはそれ以上に町民が自らの意思によって社会的な課題を解決することの意義は大きい。市民が主役になって行動を始めてこそ、町は大きく変わっていく。

市民活動や地域活動に取り組む団体はその分野における専門家集団でもある。市民がこうした地域の将来や課題に興味持ち、共に学び、実践することを繰り返す。こうしたことを生み出す機会や共通の場づくりを市民の自発性にゆだねるのではなく、町の10年後を見据えて、町として「活動を生み出し、結び、広げる」ためのオープンな仕組みを用意することも重要である。

一時のイベントで終えるのではなく、長期的な視点で取り組んで行くことで成果を生み出していく。ある一時に行政が目的をもって市民活動の発生を促すというよりも、その時々の社会情勢や地域課題に対応した市民による活動が自発的、自然発生的に生まれる町でありたい。

一方で、民間企業の本業を通じて地域貢献を行う考え方が定着しつつある。公共的課題を解決し、持続可能で良質な市民サービスを提供するには、従来の発想にとらわれず、あらゆる分野において官民連携を積極的に進めることが必要である。

様々な主体の活躍が求められる場は、公共スペースだけではない。空き家、空き店舗、街区公園など、民間、公共を問わずまちなかに点在する遊休化したスペースは、様々な活動の場に生まれ変わる可能性を秘めている。固定観念を捨てよう。

戦略Ｇ　地域に人々の集まる”キッカケ”を生み出す

気軽に通える、誰かと会っておしゃべりできるなど、様々な人が集まる場は、安心や安全をもたらすだけでなく、新たなアイデアや活動が生まれるきっかけの場でもある。その活動内容、活動主体の規模の大小、あるいは世代にかかわらず、混ざりあい、交流する、触発し合うことで、多様性のある魅力ある地域をつくることができる。

戦略Ｈ　活動を生み出す学びの場づくり

時代とともに新たな活動が生まれ、地域の様々な課題を克服してきた。その時々の社会課題や時代的な要請に柔軟に応えるためには、市民の中からこれらの機運や活動が生まれる必要がある。多様な参加者が集まり、参加者同士の自発的な活動が生まれる学び舎をつくろう。

戦略Ｉ　町の中のキープレイヤー同士で連携する

個別相互に連携するだけでなく、東武鉄道と東武動物公園、日本工業大学、民間セクター、ＮＰＯ法人等と町との連携を『チームみやしろ』で一体的に進める

戦略Ｊ　街中の遊休スペースを効果的に活用する

昔よく使われていた場所が今は使われていない。人口構造や社会環境が変化するなか、求められていた役割が変化している。今、役割を変える時だ。一見使いようがないスペースも、使い方が固定されてしまったスペースも、使う人が変われば宝の山。地域に役立つスペースに変えよう！

コンセプト４　社会環境の変化に対応し、行政運営を変化させ続ける

戦略Ｋ　縦割りから横断的行政運営へ

地域の社会課題が複雑化するにつれて、その解決は行政の一部署だけでは、難しくなってきている。縦割りのままの行政組織では、時代の変化についていけない。“横串組織”、“即応できる機動部隊”が必要だ。

戦略Ｌ　官主体から多様な主体による公共の運営

公共の運営には官民連携という視点を持つことも必要だ。官が公共の運営を独占するのではなく、市民や民間セクターなど、多様な主体が公共を運営することにより、より効果的で良質な運営ができるようになることができ、柔軟性や即応性を発揮することもできる。町民がわがこととして、様々な活動に取り組むためには、官か民かではなく、官も民も公共の運営の主役である、という視点を持つことが大切である。

戦略Ｍ　過去の目的に縛られず、今後求められる機能を核とした公共施設の再編

町内の公共施設は、建設当時と同じ発想で建て替えるのではなく、建物の機能が今後の宮代町に果たす役割を精査した上で公共施設のあり方を考えていく必要がある。どのような機能が必要なのか、複合化は可能か、既存施設を利用転換できないかなどを総合的に考えることが求められる。重要なのは建物そのものではなく、その建物の機能、その建物の中で行われる活動だ。

社会環境の変化、その先の未来を見据え、行政は変化し続けなければならない。